研修会

初夏のトンボと生きもの観察・湿地の植物たち

日　時：6 月 17 日（月）9：30～14：00
場　所：根木内歴史公園（松戸市）
講　師：柄澤保彦氏　相澤章仁氏、　担当指導員：田中玉枝
参加者：会員 33 名＋会員外 10 名＋講師 2 名　計 45 名

梅雨真最中の観察会の開催で天候が心配されたが、前日までの雨も止み午前中は曇り空、午後からは日差しがさす好天に恵まれた。午前は、昨年千葉で開催された自然観察指導員の講習でもお世話になった柄澤先生を招き、公園内の生物の観察会を行った。まず出発する前に、30分ほど観察会で遭遇する可能性の高い、危険生物や外来種の生物について、写真を使い分かり易い説明があった。外来生物の一例として公園内で増え続けているカダヤシにスポットをあて、従来種のメダカと比較しながらの説明があった。いざ現地での観察会に出発。最初のスポットは湿地帯の端の水たまり。水中内に大量に生息するカダヤシを捕獲し、透明容器に入れ特徴を確認、メダカとの違いも写真を使い説明された。スポットを離れる際、観察に使ったカダヤシの扱いについて議論した。先生は動物愛護の観点から考えれば、元の場所に戻すべきであろうが、従来の生態系に戻すという観点から考えれば、外来種は駆除すべき対象であるという結論が出て、今回はその場で処分した。各観察会でも、外来種の進出は従来の生態系を壊してしまうことを多くの参加者に理解してもらい、外来種を含む生物の移動、放流は法律でも禁じられていることを伝えることは大切なことであることを学んだ。次は森林エリアへ。参加者は捕虫網を使い、我を忘れて昆虫採集。捕獲した昆虫は蓋付のガラス容器に入れて説明を受けた。例えば、蜂・アブ類は上に飛ぶ習性を利用して容器を上に下から蓋を閉めることで網から安全に入れることができると学んだ。最後は湿地エリアに戻り、トンボの観察。観察できたのはショウジョウトンボ・シオカラトンボの 2 種。出発地点に戻り、配布された資料を使い観察会のまとめとふりかえりを行った。参加者は今後自分が観察会でも使用できる観察エリアの生態系ピラミッドを作成した。自が今後開催する観察会でも使える、アイデア満載の充実した観察会でした。

記　小松　新（佐倉市）

午後は涼しい木陰にシートを敷き、講師：相澤さんの博士号取得「群集生態学」（二つ以上）の一端を伺うこの公園は、上富士川と平賀川に挟まれた舌状台地として残っている。このことは自然の価値が高い。（自然が壊れる原因の一つは開発、又自然のほったらかし。たとえば里山の放棄―葭原の発生―雑草が減るなど）。この湿地を自然の生態系として適切に管理を行っていくために、調査・研究を進め、管理計画の策定のための 2008～2011 の調査。根っ子の会の方々と密接なミーティングを行う。
自然地を管理することは希少種を保護するばかりではなく、その希少種が生育している環境・共に生息している種類・その環境を支えているシステムまで、幅広く総合的な視野が大切である。調査をもとに、ゾーン毎の管理方針として植生保全を念頭に、キショウブ・ミクリゾーンではキショウブの移出を抑え、ミクリの保護、ミゾソバの群落は草刈りをしないことにした。（刈ると外来種が移入してくる可能性あり）。通路の確保のため 1～2m 程度の幅の草刈り、畔、広場の管理は足首程度の高さで草刈り実施。ゾーンによりシーズン毎のローテーション管理、草刈りによる変化をその都度柔軟に観察している。
ミゾソバの隣のヨシを刈るとヘラオモダカが出てきたり、池となっている場所を耕すと埋土種子としてコナギ、タコノアシが出てくる。最後にコドラート調査法を体験、直径 30cm の輪を後向きに投げ輪の中の個体数をカウントする。地図に落とすと、どんな植生かが見えてくる。湿地ではドクダミ・オカトラノオ・ミクリ・クサヨシ・コゴメイ・ミコシガヤ・アゼナルコ、広場ではヒメジョオン・シロツメクサなどが花盛り。
独自の根木内湿地レッドリストの資料も作成されていた。　　記　宮川榮子(船橋市)